

な御代をつくるためだけの努力をする人間になってほしいとの願いで、あえて書き記した。

## 北朝鮮の回想

北海道 内 藤 美 雪

永い歲月やっと国交回復に向く昨今、終戦当時十五歳の私も今は六十歳還暦を迎えました。

私共一家は興南市に住み、日本窒素肥料株式会社に父が働いており、昭和三年叔父を頼りに朝鮮に渡り、九人の家族を支えておりました。

十二年頃国を挙げての勝ち祝い、旗行列、夜は提燈行列、幼い私は手を引かれて歩いたものです。

十六年私は私鉄で働き、初任給六十円をもらった覚えがあります。だんだん戦争は不利となり、毎日大本営発表のニュースをくい入る様に聞いたものです。

そのうち長兄が海軍志願、すぐ次兄が予科練志願後に、父四十三歳で応召、残された母と六人の不安な生活、

終戦を迎え、九月十五日突然朝鮮の保安官の監視で三週間後の立退命令が出て朝鮮人の社宅と交換させられた。

着のみ着のまま取敢えず鍋・やかん等を持って二度と戻ることの出来ない家を捨て、家財道具は持ち出すこと禁じられ、苦境に立たせられた日本人、ソ連人と合部屋二世帯の生活が始まった。食事は塩サンマ一匹に大豆や高粱を煮込んだ雑炊を食べたものです。

十月十二日頃の間北朝鮮の日本の兵隊さんが、毎日何万人何千人とぞくぞく集結し、家の近くの道を通って興南港からシベリヤ方面に送られ、落伍者はソ連兵に銃でたたかれ可哀相な一面も見ました。

厳寒にはいり栄養失調者がだんだん増え道端に餓死した日本人、虫の息で倒れている者、悲惨な日々、また兵隊さんも出航までの間毎日三人五人と死んでタンカで運び、死体からは衣類は取られ、フンドシ一枚の裸にされて埋められた。

夜は外出禁止、夜中は戦車の音がごうごうと鳴り響き、眠られぬ日九か月間も生きた心地ではありません。お金のない人は売女も出て来て深刻な状態でした。

正月も過ぎ春近く帰国の噂も流れ始めやっと、五月婦人子供が優先的に帰ることになり貨物車で元山まで移動、そのとき私の体に高熱と発疹が出てチフスと診断され、母も妹も伝染し野戦病院に入院、互いに九死に一生を得ました。

日本の軍医、ソ連の看護婦の手厚い治療のおかげでだんだん回復にむかい、入院中、妹十歳弟八歳の二人は別の団体と一緒に帰国し、博多のお寺孤児の収容所にあづけられ、役場よりの連絡で兄と叔父が引き取りに行ってきたそうです。

三歳の妹は置き去りとなり仮病院内をうろろしてるところに私達が出逢い本当にほっとしました。

七月一日川の手前約一キロに集落があり、追はぎに逢いました、お金と物を没収され渡るとまた川があり、これが本当の三十八度線の川です。そこでもまた、お金や品物を要求されました。百人に壹万円出せといわれ、皆で協力してお金を出し合い、八万八千円を渡し舟で渡りました。

南朝鮮にはいり山越え谷越え六キロ近く歩きアメリカ

の収容所にたどり着き、早速DDTの粉末を浴びせられ、食物はアメリカのソーセイヂやシチューの缶詰、初めて食べる味、おいしく喜びました、嬉しかったものです。

釜山港より興安丸に乗船し、佐世保の南の島へ上陸し、国から一人五百円の支給と母に聞き、苦しい生活、毎日おかゆや雑炊三年余食べました。

二十一年農地改革問題のさなか、父親代わりの兄は農業に対する執念を燃やし、母とともに頑張り苛酷の人生を歩きました。父は三十年に戦死の公報がはいり、母は四十二年胃癌で亡くなり、気苦勞の多かった並々ならぬ生涯でした。敗戦の辛苦心の中に今、走馬燈のように回想し、辛かった日々を思うと涙が止まりません。

国のため外地に出て働いた親達、社会的国家の犠牲になり、多くの人が死んでいった北朝鮮の最果ての異国の同胞、終生忘れる事はない。